

特集 都市・遊牧・旅の思索を読む

日常的な空間や物、その物質性に根ざした都市の政治の可能性

「ヴァナキュラー(土地言葉)」を浮かび上がらせようとする運動とその背景文脈を描く

鈴木智之

「二〇世紀中、これだけ頻繁かつ全面的に建てなおされた大都市は、おそらく東京をおいて他にないだろう。本書のなかでサンドはそう言っている。世界中の他の都市を知っているわけではないが、確かにそうだろうと思わせるほど、この街は変貌の頻度と規模において際立っている。しかもそれは、関東大震災や東京大空襲といった破壊的な出来事のためだけでなく、むしろ「小刻みに進んだ開発」がもたらしたものであった。とりわけ戦後、焼け跡からの復興、高度経済成長、そして「世界都市東京」への転生の企てにいたるまで、東京は常にスクラップ・アンド・ビルドの波のなかに身を置いてきた。その変化の速さから、この街を「記憶喪失症の都市」と呼ぶのは加藤周一だったが、

谷中(に部屋を借り、『谷根干』)は単に建物が置き換えられていくというだけではない。グラウンドデザインをもたないまま雑然と進められていく空間の再構築が、場所の同一性を損ない、生活の連続性を断ち切ってきたのだ。しかし、持続と同一性へのこだわりを放棄してしまったかのようなこの街で、一九七〇年代以降、過去の再発見と歴史の保存を志向する多形的な運動が展開されていく。例えば、森まゆみを中心に行かれた地域誌『谷根干』(一九八四年創刊)。それは、小さな店が軒を連ねる商店街や木造長屋が並ぶ路地を「町」という独自の風合いをもつ風景として再発見していった。サンドは、一九八〇年代に東京大学で建築史を学んでいる時、本郷キャンパスから近い

再定義が行われていく時代に旅先で出会う魅力的な人物を触媒にして、二人の旅は転がっていく。ドキュメンタリー映画のあり方。ロードムービーだ。「出発地と終着地以外は何も決めず」「とにかくそこに身を置いてみて、なに出会うのか、なにに引っ張られるのか、どのような反応が生じるのか、それを見てみよう」(324頁)。取材対象や論じ方を予め決めた結論ありきの取材は、およそ「ドキュメンタリー」ではない。彼らの「行き当たりばったり」は、論点先取を避ける術である。叙述は時系列に沿うが、描かれるエピソードにテーマが与えられる。一見あちこち思考が飛びよついで、次第にテーマたちが緩やかにつながっていく。読み進めると、体験の層が連なっていく。

松尾による写真が、本書の語り口にすぎない不調和を与えている。「語り」の強い民族誌と異なり、写真には「余分な」情報が映り込む。やや引きの画が多く、細やかで観察的なイメージ群。光の情報量が圧倒的なカラー写真。写真は章と章の間で見られる。つまり民族誌を読んだ後にその旅程の写真をみる構成だ。この「語り」の順序では、テキストを通して得た「イメージ」を、写真が補ったり書き換えたりすることになる。読者は文字情報で受け取っていた「彼らの経験」がいかに不安定な「像」なのかと、テキストへの没入を留保しつつ読み進める事になる。写真に出会い、この「ローカルな歴史保存運動」にも関わっていたのだという。『東京ヴァナキュラー』に描かれるのは、歴史的な出来事を記念し集合的記憶を形作る「ミニエメント」中心の記憶実践ではなく、「日常的な空間や物」に対する関心をベースに過去を再発見し、地域の歴史のなかで形作られた「作法・空間・感覚の言語」——サンドはこれを「ヴァナキュラー(土地言葉)」と呼ぶ——を浮かび上げようとする運動とその背景文脈である。

「谷根干」と並んで語られるのは、建築史家・藤森照信や前衛芸術家・赤瀬川原平らによって一九八六年に結成された「路上観察学会」の活動である。「マンホールのふた、消火栓、建物装飾の動物類、無用の階段」等々、「街中の建造物や道路」に付着した「美しくも「不可解」な物を発見し、記録し、報告する試み。官僚的な合理性による「日常の植民地化」に抗する企てとして、ギー・ドゥポール(シチュアシオニスト)の「漂流」の実践とも比較される「路上観察」は、不動産投機が政策的に促され、経済的価値という観点から空間の再定義が行われていく時代に

アイデンティティを流用され、その意味を生かしている。

ジョルダン・サンド 著
池田真歩 訳
▶東京ヴァナキュラー
モニュメントなき都市の歴史と記憶
9・24刊 四六判304頁 本体3600円
新曜社



「路上観察学会」の活動として位置づけられる。こうした一連の動きを、サンドは一貫して運動論的な文脈のなかで論じている。第一章が「広場の政治」にあらわされていることが、その基本的な視座のあり方を示している。かつて、集会やデモといった市民の集合的な意志表示が広場を舞台として展開された時代があった(大学のキャンパスも、この意味での広場のひとつであった。例えば、一九六九年、新宿駅西口地下広場で毎週土曜日の夜に行わ

遊牧民の生活文化から人類史を構築する
ポスト・コロナ時代の新しい生き方のヒントとして

アメリカをふたりにで〈何でも見てやろう〉

「書かない」人類学的実践の現在地

小森真樹

アメリカ地域をフィールドワークする者として強い共感を抱いた(第6章で登場する天地創造博物館「クリエーション・ミュージアム」は評者が通つフィールドでもある)。ステレオタイプな「アメリカ」

それは単に建物が置き換えられていくというだけではない。グラウンドデザインをもたないまま雑然と進められていく空間の再構築が、場所の同一性を損ない、生活の連続性を断ち切ってきたのだ。しかし、持続と同一性へのこだわりを放棄してしまっ

た。この「語り」の順序では、テキストを通して得た「イメージ」を、写真が補ったり書き換えたりすることになる。読者は文字情報で受け取っていた「彼らの経験」がいかに不安定な「像」なのかと、テキストへの没入を留保しつつ読み進める事になる。写真に出会い、この「ローカルな歴史保存運動」にも関わっていたのだという。『東京ヴァナキュラー』に描かれるのは、歴史的な出来事を記念し集合的記憶を形作る「ミニエメント」中心の記憶実践ではなく、「日常的な空間や物」に対する関心をベースに過去を再発見し、地域の歴史のなかで形作られた「作法・空間・感覚の言語」——サンドはこれを「ヴァナキュラー(土地言葉)」と呼ぶ——を浮かび上げようとする運動とその背景文脈である。

この二事例と背景を共有しながらも、ある種の対照性をもって論じられるのが、江戸東京博物館に代表される、日用品の収集と過去の日常生活の復元的な展示を行う公的な取り組みである。それは、「共同の過去を記念したい」という衝動と「日常生活を重視する歴史哲学」との出会いから、「ありふれた物」のなかから「歴史遺産」を発見する試みであり、「資料」の保存以上に、「共同体的なアイデンティティの継承」を目指すものとして位置づけられる。

こうした一連の動きを、市民たちの活動は、空間を自分たちのものとして取り戻し、日常性のなかに、今ある社会的・政治的な権力から離れた紐帯を生み出すことによってきた。人々が抽象的な理念の下に結果して戦うことに徒勞感を抱き始めた時代に、「空間と物の物質性こそは、より幅広い層の市民がそれらのもとに集うことを可能にした」とサンドは評価する。もちろん、その限界も指摘される。「日常的なもの」は、集合的

松原正毅 著
▶遊牧民の人類史
構造とその起源
8・5刊 四六判286頁 本体3000円

アメリカの〈周縁〉をあるく

旅する人類学

中村寛・松尾眞 著

本書は、アメリカのハレムでフィールドワークを行ってきた文化人類学者中村寛と、アメリカ在住の写真家松尾眞による、八年越し七度の旅の記録である。ほぼ毎年、短期集中断片的に二人が実施した、アメリカの「周縁」、つまり地図の「真ん中」の地域をめぐる行き当たりばったりの旅、軽い目的意識と軽い計画で、集合と解散の地点だけを決め、出会いがあれば流されて、噂を聞けばそれを見に行く。流れに身を委ねる。ローカルなものを食べる。写真家はイメージを形にし、民族誌家は体験から言葉をつむぐ。書物に真つづけられた思索が叙述に時折顔を出す。四六判(縦18・8cm)368頁の書籍で、写真は章と章の間で見られる。「幕間」に控えめに示される。表紙と冒頭の写真はカラー版、その他はモノクロだ。

中村が書くように、一人旅とそうでない旅行では、経験の質が大きく変わる。行き先はどこか、ルートはどうか。ひたすら見るのか、話を聞くのか。ずいずい入るのか、思慮深く黙るのか。人と離れたっていく旅では、生まれる言葉も独特だ。誰と出会う言葉が交わすのか、旅仲間と何を話すのか。孤独な内省と引き換えに、ケミストリーが得られる。記録はどうか。文字が写真か、映像か音か。紙のノートかスマートフォンか。いかにインプットし、アウトプットするのか。これらの組み合わせで、旅のパーティが生み出す経験と記録が動いていく。中村と松尾は、「探究心」「人と交わる柔らかさ」「思っていることを「翻訳」せずお互い話せる」という点で結ばれているという(16頁)。

家マコトは民族誌にも登場する。知性と想像力で大胆に飛躍する中村の解釈に対して、別の角度から俗っぽい妙に鋭いコメントをマコトが投げかける。奇しくも関西弁の彼は「ツッコミ」担当のようだ。要は、インプットにもアウトプットにも、その「読み」のプロセスにさえも、予定調和や一つの「正解」を拒む、相対化の仕掛けが織り込まれている。多様な読みが開かれていることはドキュメンタリー映画・映像メディアが持つ魅力だが、テキストメディアの民族誌でそれを実現するのはなかなか難しい。本書は、民族誌と写真の合わせ技でそれを実験している。大判の写真を実験している。大判の写真を実験している。大判の写真を実験している。

「旅のパーティ」には学生も含まれる。多摩美術大学で中村が立ち上げた自主ゼミ「Low and Found」における学生との対話と協働が、本書の元となる原稿を生んだ。中村がつむぐ言葉の背景には先人の仕事がある。「ホモ・モーペンス」動く人(「新原道信」の身振り)と「なんでもみてやろ」精神(小田実)で、「忘れられた日本人」(宮本常一)ならぬアメリカ人を「(324頁)。論点先取りして物事を見ることがいかにすてきな書物である。」(武蔵大学人文学部准教授)

「民族誌的転回」という批評用語さえ登場して久しい。書くことへの省察の上で、非テクニク的な実践も大胆に導入しようという文化人類学周辺の動向——「書かない」人類学的実践に本書を脈づけることもできる。しかし、こうして言葉で説明してしまうのが申し訳なくなる本だ。「積極的ノープラン。戦略的無謀。能動的徒手空拳。旅のプリコラージュ。かっこよく書けばどういこうだが、中身はごくふつうの旅だ。(…むしろ、旅の過程で眼がひらかれ、問いが深まり、対話がひろがっていくような探究の記録である」(324頁)。論点先取りして物事を見ることがいかにすてきな書物である。」(武蔵大学人文学部准教授)

中村寛・松尾眞 著
▶アメリカの〈周縁〉をあるく
旅する人類学
7・21刊 四六判368頁 本体2700円
平凡社



「民族誌的転回」という批評用語さえ登場して久しい。書くことへの省察の上で、非テクニク的な実践も大胆に導入しようという文化人類学周辺の動向——「書かない」人類学的実践に本書を脈づけることもできる。しかし、こうして言葉で説明してしまうのが申し訳なくなる本だ。「積極的ノープラン。戦略的無謀。能動的徒手空拳。旅のプリコラージュ。かっこよく書けばどういこうだが、中身はごくふつうの旅だ。(…むしろ、旅の過程で眼がひらかれ、問いが深まり、対話がひろがっていくような探究の記録である」(324頁)。論点先取りして物事を見ることがいかにすてきな書物である。」(武蔵大学人文学部准教授)

「民族誌的転回」という批評用語さえ登場して久しい。書くことへの省察の上で、非テクニク的な実践も大胆に導入しようという文化人類学周辺の動向——「書かない」人類学的実践に本書を脈づけることもできる。しかし、こうして言葉で説明してしまうのが申し訳なくなる本だ。「積極的ノープラン。戦略的無謀。能動的徒手空拳。旅のプリコラージュ。かっこよく書けばどういこうだが、中身はごくふつうの旅だ。(…むしろ、旅の過程で眼がひらかれ、問いが深まり、対話がひろがっていくような探究の記録である」(324頁)。論点先取りして物事を見ることがいかにすてきな書物である。」(武蔵大学人文学部准教授)

「民族誌的転回」という批評用語さえ登場して久しい。書くことへの省察の上で、非テクニク的な実践も大胆に導入しようという文化人類学周辺の動向——「書かない」人類学的実践に本書を脈づけることもできる。しかし、こうして言葉で説明してしまうのが申し訳なくなる本だ。「積極的ノープラン。戦略的無謀。能動的徒手空拳。旅のプリコラージュ。かっこよく書けばどういこうだが、中身はごくふつうの旅だ。(…むしろ、旅の過程で眼がひらかれ、問いが深まり、対話がひろがっていくような探究の記録である」(324頁)。論点先取りして物事を見ることがいかにすてきな書物である。」(武蔵大学人文学部准教授)

カルチャー・オンザ・ウェッジ
昨年出た本の中で圧巻は
の論考、竹中労、日名子暁な